

日本語学習者のネット利用状況と学習サイトへの期待

—海外11拠点の調査結果から—

伊藤秀明・石井容子・武田素子・山下悠貴乃

1. 調査の背景

2014年、世界中のインターネット利用者は30億人に達したことが発表された (International Telecommunication Union 2014)。インターネットが急速に普及する中、日本語教育においても近年、様々な機関や個人によってインターネットを利用した学習素材が多く開発されている。国際交流基金関西国際センターにおいても2007年7月の「日本語でケアナビ (<http://nihongodecarenavi.jp>)」の公開を皮切りに、「アニメ・マンガの日本語 (<http://anime-manga.jp>)」、「NIHONGO e な (<http://nihongo-e-na.com>)」、「まるごと+ (まるごとプラス) 入門 (A 1) (<http://a1.marugotoweb.jp>)」、「まるごとのことば (<http://words.marugotoweb.jp>)」、「まるごと+ (まるごとプラス) 初級 1 (A 2) (<http://a2.marugotoweb.jp>)」と日本語学習に関連する Web サイトの開発、公開を行ってきた。このようなインターネットを利用した学習素材は時間や距離を越えて学習者に直接提供できる利点から日本語教育関係者によって開発が続けられているものの、日本語学習者のインターネットの利用実態については現在までほとんど述べられてこなかった。そこで本稿では、国際交流基金関西国際センターが今般、さらなる e ラーニング事業の展開のために行った国際交流基金の海外20拠点⁽¹⁾の日本語講座の学習者を対象にしたインターネット利用などに関するアンケート調査の結果から、日本語学習者のインターネットの利用状況および日本語学習者が求める学習サイトについて報告する⁽²⁾。

2. 先行研究と本報告の意義

世界中の人々のインターネットの利用実態を報告した文献は数多く存在するが、対象を日本語学習者に限ったインターネットの利用実態の調査はあまり多くない。その中でも比較的大規模な調査として梁 (2009)、武田 (2010)、三國他 (2011) の3つがある。

梁 (2009)、武田 (2010) はそれぞれ中国、ドイツの日本語学習者を対象にインターネットの利用についてのアンケート調査を行っており、三國他 (2011) では6カ国 (日本、中国、タイ、ニュージーランド、ドイツ、トリニダード・トバゴ) の日本語学習者のメディアの使用実態に関するアンケート調査を行っている。

これらの研究はいずれも200名を越える学習者に対して調査を行っており、日本語学習者の

インターネットを利用した活動の実態の一側面を明らかにしている。しかし、距離や時間を瞬時に越えるインターネットの特性を考えた場合には、梁 (2009)、武田 (2010) のように特定の1カ国を対象に調査を行うだけではなく、比較対象となる複数地域の学習者のインターネットの利用実態を明らかにすることで、特定の国や地域の特徴も明らかになると思われる。その点で三國他 (2011) は複数地域の調査を試みているが、300名ほどの調査対象者のうち、特定の2カ国の学習者が調査対象者全体の約3分の2を占めており、複数地域の日本語学習者のインターネットの利用実態を明らかにしているとは言いがたい。

そこで上記のような課題について、本稿では梁 (2009)、武田 (2010)、三國他 (2011) を上回る調査人数・地域を対象にアンケート調査を行い、その調査結果をもとに日本語学習者のインターネットの利用実態を描き出すことを試みる。また併せて、本稿では利用実態だけではなく、日本語学習者がどのような日本語学習サイトを求めているのかについても調査し、その特徴を明らかにする。本稿の意義は、このようにインターネットの利用実態とインターネットを利用した学習に求められているものという学習者の現実と理想の両側面からの視点のデータを提供することにある。

3. アンケート調査

アンケート調査は2014年5月末から7月上旬の約1ヶ月間、国際交流基金の海外20拠点の日本語講座に通う日本語学習者を対象に実施した。アンケートは国際交流基金のeラーニングに関する様々な質問を行ったが、本稿ではアンケートの中でも①学習者のインターネットの利用頻度、端末別の利用率とその利用場所、インターネット上での行動などインターネットの利用状況に関すること、②学習者が日本語学習サイトに期待すること、の2点に絞って報告する。

3.1 アンケート方法と考察対象

アンケートは拠点の所在地の各言語に翻訳した上で海外20拠点の日本語講座に通っている学習者を対象に行なった。アンケートの有効回答者数は1683名であったが、アンケート収集期間中に開講されている日本語講座が少なく、回答があまり得られない拠点もあった。そのため、本報告では20拠点すべてを対象とするのではなく、回答数と拠点の地域分散を考慮し、調査対象拠点の半数以上である11拠点1053名を考察対象とした (表1)。なお、各拠点の日本語講座受講生に対してアンケートを行なったことから、拠点ごとの年齢構成の多少の異なりも見られたが極端に偏った傾向は見られず、どの拠点もほぼ同様の年齢構成であった。図1は11拠点の総回答者の年代別割合、図2は11拠点の総回答者の学習歴別割合である。

表1 11拠点の所在地と回答者数

拠点の所在地	回答者数
ローマ (イタリア)	106
ケルン (ドイツ)	105
パリ (フランス)	96
モスクワ (ロシア)	114
カイロ (エジプト)	100
バンコク (タイ)	107
クアラルンプール (マレーシア)	90
ニューデリー (インド)	84
シドニー (オーストラリア)	75
ハノイ (ベトナム)	110
ロサンゼルス (アメリカ)	66
合計	1053

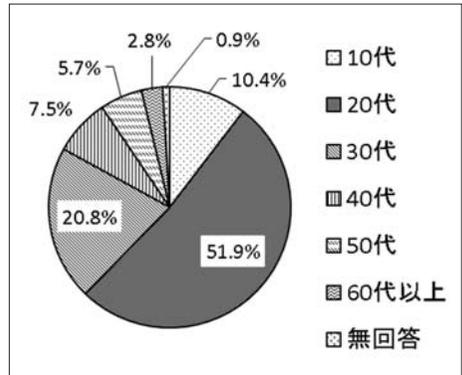


図1 回答者の年代別割合

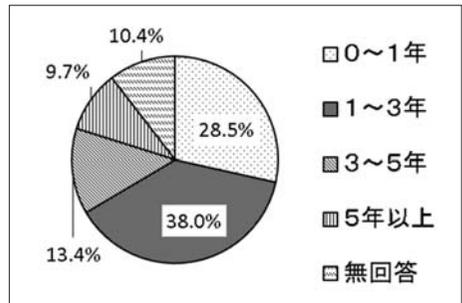


図2 回答者の学習歴別割合

4. 日本語学習者のインターネット利用状況

インターネットの利用状況については仕事や勉強以外の自主的な利用に限定し、インターネットの利用頻度、端末別の利用率とその利用場所、インターネット上での行動の3点について調査した。

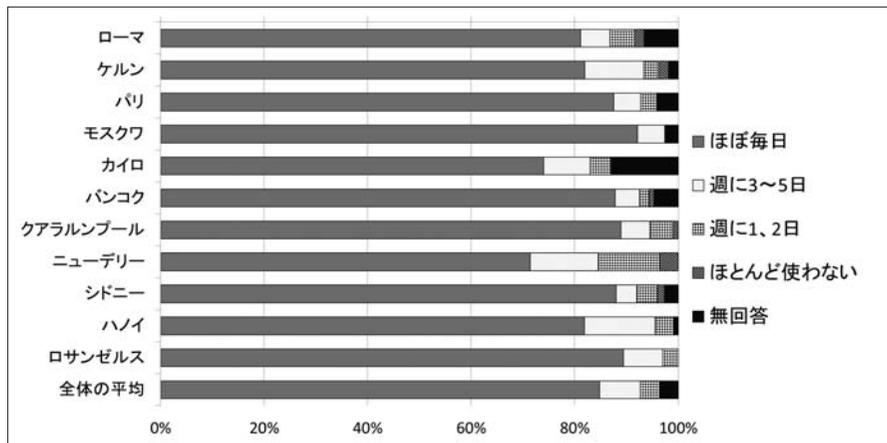


図3 インターネットの利用頻度

4.1 インターネットの利用頻度

日本語学習者の回答ではインターネットを「ほぼ毎日利用している」という回答が最も多く、日常的にインターネットを利用していることが明らかとなった(図3)。ニューデリーとカイロでは「ほぼ毎日」が80%以下になるなど地域差も多少見られたが、本調査ではフォローアップ調査を行わなかったため、その理由までは明らかにできなかった。

4.2 端末別の利用率とその利用場所

日本語学習者がよく利用する端末は地域に関わらず、PC、スマートフォン、タブレットの順であった(図4)。近年、途上国ではスマートフォンが急激に普及していると言われていたことからスマートフォンの利用率がPCの利用率を上回ることが予想されたが、今回の調査ではそのような傾向は見られなかった。また、バンコク、ロサンゼルスではPCの利用率が低い一方でスマートフォンの利用率が高く、パリではスマートフォンの利用率が比較的低いのに対し、タブレットの利用率は高いという傾向が見られた。その他の国ではそのような端末間ごとの相補的な傾向は見られなかった。

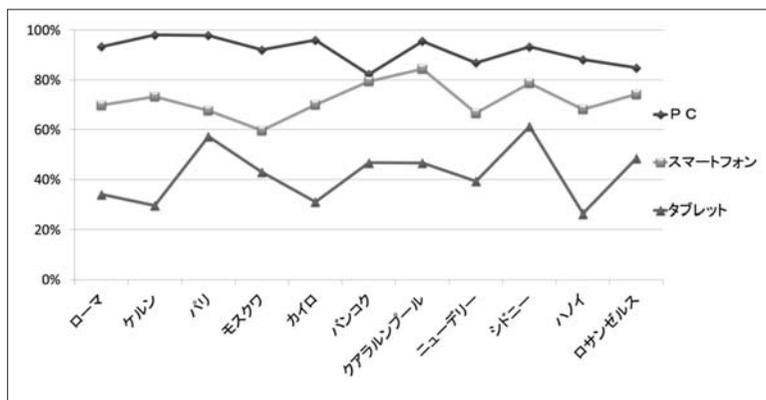


図4 端末別の利用率

端末別の利用場所については表2に示す。スマートフォンではモバイル端末の特性を活かし、場所を問わず利用されている傾向が見られる一方、同じくモバイル端末であるタブレットはPCと似たような場所で利用されており、モバイル端末としての使用というよりはPCの代替として利用されているようである。

また、ニューデリー、ハノイでは他の地域に比べ、屋外での利用率が低いことが特徴的であった。この要因はインターネット環境の未整備や利用にかかる経費などと考えられるが、世界的にモバイル端末が普及している一方で、モバイル端末の特性を活かした使用とは異なる

使い方がされている地域があるということが確認された。

表2 各端末の利用者の半数以上が端末を利用する場所

(A：自宅、B：学校・職場、C：カフェ・外、D：公園、E：ネットカフェ、F：移動中)

対象	PC	スマートフォン	タブレット
ローマ (イタリア)	A	A、B、C、D	A
ケルン (ドイツ)	A、B	A、B、C、D、F	A
パリ (フランス)	A、B	A、B、C、D、F	A
モスクワ (ロシア)	A、B	A、B、C、D、F	A、B、C、F
カイロ (エジプト)	A	A、B、C、F	A
バンコク (タイ)	A、B	A、B、C、F	A
クアラルンプール (マレーシア)	A、B	A、B、C、F	A、B
ニューデリー (インド)	A	A、B	A
シドニー (オーストラリア)	A、B	A、B、C、F	A
ハノイ (ベトナム)	A、B	A、B、E	A、B、E
ロサンゼルス (アメリカ)	A、B	A、B、C、F	A

4.3 インターネット上での行動

インターネット上での行動 (図5) としては、先行研究と同様に動画視聴を行なっている割合が多かった。一方、先行研究によって、「利用は主に「情報収集」「情報受信」であり、「コミュニケーション」や「情報発信」の方は少ない。」(梁2009：149)、「受動的な形態の使用法が圧倒的に多く、「テキストチャット」、「音声チャット」などの双方向的な使用法はそれほ

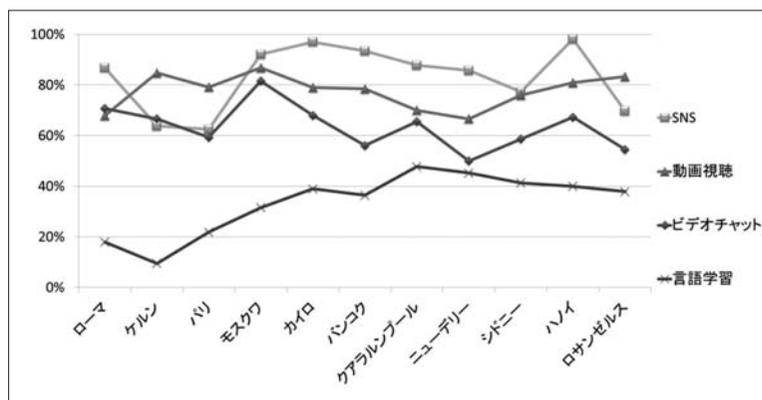


図5 インターネット上での行動

どみられない。」(三國他2011:158)と指摘されるのとは異なり、SNS や Skype のようなビデオチャットという回答が多く見られた。また、ローマ、ケルン、パリでは言語学習という回答が9~21%でその低さが際立っていた。その要因はネットでの学習に頼らずとも様々なヨーロッパ言語をお互いに学びやすい環境にあることが考えられるが、この点についてはより詳細な調査をした上で結論を出す必要がある。

5. 日本語学習者が日本語学習サイトに期待すること

日本語学習サイトへの期待については、言語を問わない自由記述で「日本語を学ぶために、どんなサイトがあったらいいと思うか」という質問を行った。表3は回答の一部を報告者がカテゴリに分けたものである。

まず、地域に関わらず多く見られたのが、双方向性を期待する声である(ア)。交流したい相手は教師、日本語母語話者、学習者同士など様々であるが、インターネット上の学習であっても人とのつながりを求めており、SNS やビデオチャットの利用の多さとも合致する。また、日本文化に関する情報を求める学習者も多く、「日本語学習サイト」の意義が広い視野で捉えられていることが推察される(イ)。その他には、自身の日本語レベルに応じて使えるなど使いやすさを求める声も多く、ダウンロード時間が短いことや動画が長すぎないことなどといった意見からは、動画や音声言語が語学学習サイトに当然のものとして認識されていることもうかがえた(ウ)。そのほかに、自分の分かる言語で表示できる多言語対応を求める声も多かった(エ)。

また全体を通して、地域によって学習サイトに求めるものの差もうかがわれた。例えば、ロ

表3 日本語学習者が求める学習ウェブサイト

<p>ア：双方向性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ネイティブや学生と会話ができる。 ・教師とやり取りできる。 ・教師と学生で構成されるオンライン授業。 ・グループ活動ができるもの。 	<p>オ：文法・語彙</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文法の疑問を解消できる掲示板。 ・レベルごとに編成した文法や語彙の説明。 ・語彙を増やすためのフラッシュカード。 ・文法の例があるスライド。
<p>イ：文化情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伝統衣装・ライフヒストリー・文化などのテーマごとの記事があるインタラクティブなサイト。 ・日本や日本文化について見たり、知ったりすることができる。 	<p>カ：漢字・文字</p> <ul style="list-style-type: none"> ・漢字を覚えるためのエクササイズとその方法を提供する。 ・漢字の歴史を学ぶ。 ・漢字や部首の説明があるもの。
<p>ウ：使いやすさ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ダウンロード時間が短い。 ・長すぎないビデオがある。 ・シンプルで学びのステージが明確に示されている。 ・ひらがなの on/off オプション。 	<p>キ：イラスト・写真</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文字が少なく、視覚的情報が多い。 ・イラストや写真がたくさんある。 ・記憶に残りやすく、生き生きとしたイラスト。 ・意味がイラスト化されているもの。
<p>エ：多言語対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヒンディー語の訳があるもの。 ・日本語で書かれているが、タイ語訳がある。 ・複数の言語で表示されている。 ・文法説明がドイツ語でされているもの。 ・英語かインドネシア語があるもの。 	<p>ク：その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理解に役立つ、たくさんの例文やビデオで構成されたサイト。 ・発音のどこに間違いがあるか確認できるもの。 ・アプリでコースが受けられる。 ・どこまで学習したかが分かるようなサイト。

ーマ、ケルン、パリでは「文法・語彙」「漢字・文字」の充実（オ、カ）、バンコク、ハノイ、クアラルンプールでは、視覚的な情報を強く求めるイラストやサイト自体の見た目への言及（キ）、ニューデリーでは、「インタラクティブ」に関わるキーワードが特に多く見られた。また、ロサンゼルス、シドニーでは「日本や日本語学習に関する情報をユーザー同士がシェアできるサイト」「単語だけではなく、センテンスも発音できるサイト」「フレーズを単に覚えることから始めるのではなく、文法構造とか文化説明からスタートするサイト」など個々の要望が具体的であり、学習サイトに対して欲しいと思っている機能を明確にイメージしているようであった。

6. まとめと今後の課題

日本語教師であれば、日本語学習者がインターネットを利用した日本語学習を行なっているという実感はあると思われるが、これまで日本語学習者のインターネット利用状況や日本語学習者が望むサイトを複数地域で調査したデータは見られなかった。今回の調査も限定的な側面は含んでいるが、日本語学習者がどのようにインターネットを利用し、言語学習としてどのようなものを求めているのかについては示すことができたのではないと思われる。今後はアンケートのその他の部分の分析を行なうなど、より詳細に日本語学習者のeラーニング事情を明らかにしていきたい。

[注]

- ^①国際交流基金の海外22拠点のうち、ニューヨークは当時、日本語講座を行っておらず、ロンドンに回答を得られなかった。
- ^②本報告は2015年8月7日、8日に行われたComputer Assisted Systems For Teaching & Learning Japanese (CASTEL/J) の第6回国際会議（ハワイ大学）においてポスター発表した内容に加筆・修正したものである。

[参考文献]

- 武田ゆほの（2010）「第3部 第2章「学習者のインターネット使用に関するアンケート調査」結果報告」
武田ゆほの・樽見裕子・花田久美子（編）『紀要VJV フォーラム』11、31-39、ドイツVHS日本語講師の会
- 三國喜保子・谷口美穂・岩下智彦・川崎タルつぶら・張世襲・岩本尚希（2011）「日本語学習者の教室外におけるメディア使用の実態—6カ国におけるアンケート調査から—」『桜美林言語教育論叢』7、147-162、桜美林大学
- 梁燕碧（2009）「日本語学習におけるインターネット利用の現状調査—広州の日本語専攻大学生を対象として」萬美保・村上史展（編）『グローバル化社会の日本語教育と日本文化—日本語教育スタンダードと多文化共生リテラシー—』、137-152、ひつじ書房

International Telecommunication Union(2014). Press Release : ITU releases annual global ICT data and ICT Development Index country rankings, <http://www.itu.int/net/pressoffice/press_releases/2014/68.aspx> 2015年8月18日参照